

注1「二人快芸術」展
2009年12月19日～2010年2月21日、広島市現代美術館で開催された企画展。自己充足の行為という意味の造語『一人快芸術』をキーワードに、アウトサイダー・アートとして注目を集め、19人・組の作品を展示し、創ることや行為そのものの楽しみや悦びに裏打ちされた表現を探った。

展覧会で紹介した施設の方々は、パリのアール・ブリュット・ジャポネ展に出演したり、ニューヨークのギャラリーと契約を結んだり、少しずつマスコミの目に留まるようになりました。それだけではなく、既存の枠に収まらない表現を拾い上げていたことも特徴でした。たとえば、好きな施設職員が捨てたタバコの吸殻や立っていた場所に生えていた草などを収集する方がいて、俗に言う「問題行動」を繰り返していました。僕はこれを職員への愛だと肯定的に解釈して、広島市現代美術館の『一人快芸術』展^{注1}では参加アーティストのひとりとして選出されることができました。ただ、施設職員の身としては、施設外でどんな素晴らしい表現を見つけても、施設利用者ではない人の作品を紹介することが困難な状況にジレンマを感じていました。

一人快芸術で語られない、周縁の芸術との出会い――



広島市現代美術館の『一人快芸術』展に選出された施設利用者の武田憲昌さんによる作品

櫛野・オープン時は『アール・ブリュット・ジャポネ展』の巡回の開催依頼がありましたが、「今まで温めていた企画をやらせてくれ」という思いでした。『鞆の津ミュージアム』は施設の人たちのみでなく、多様な環境に置かれた人たちを紹介する企画展を開催していくました。最初の企画『リサイクルリサイタル・幸せの時間の共有!』展は、いわゆる「グルーピング」でした。2ヶ月間、障がい

のある方に会場で滞在制作から展示まで任せていたら、会期後半は本人が作ったものを片つ端から50円で売り出していました。

櫛野・2013年の『ヤンキー人類学』展では、ブチあげ改造自転車やデコチャリなど、ヤンキー文化に関するものを美術館で展示了しました。出展者にデコトラのミニチュアを30年以上作り続けている伊藤輝政さんという心臓に障がいのある方がいたのですが、その方の憧れが『常勝丸船団』というデコトラチームで、同じ出展者だったんです。コトトラチームで、同じ出展者だったんです。デコトラショーを開催したことと、お互いにデコトラに乗ったりプレゼントを交換したりと交流が生まれました。展覧会来場者の2割がいわゆるヤンキー層の方々で、美術館に来ないだらうと思われる人が見に来てくれて、本当の意味で「多様性」に満ちた企画でした。

アウトサイダー・キュレーター 櫛野展正

くしの のぶまさ

広島県福山市



「障がい者アート」を世に引き合わせる活動――

櫛野・僕はもともと知的障がいのある方が利用する福祉施設で働いていました。とはいっても最初から福祉に興味があつたわけではありません。大学1年生のとき、強制的に岡山の福祉施設で2泊

山出・そこで何を始めたんですか?

櫛野・施設で暮らす人たちにとつて「自分がここにいていいんだ」という自らの存在意義を主張できる活動が必要ではなかとを考えました。そのひとつにアートや音楽があると思います。絵を描くことが好きだったので絵画活動を始めたんですが、そもそも木工作業班には絵を描きたい方が集まっているわけでもないし、身体的にも描くことが困難な方も

山出・すべて初めてでした。今まで施設では年に1回、お正月に展覧会を開催していました。だけど僕は、たとえば作品は春にできているのなんでお正月まで待たなければいけないんだと思つて

いて、自分で会場を探して展覧会をしていました。展覧会のチラシも自力でフォトショッピングイラストレーターを勉強して作り、展示も見よう見まねで開催していました。生活支援業務と並行して行っていたのですが、多くのスタッフから僕だけ楽ししそうなことをしているように見られていましたね。

山出・当時はまだ施設の中にアトリエや展示する場所はなかったんですね。そもそも企画を作ると言つても初めてのことが多かったのではないでしようか? 橋野・彼らは植木鉢の下に敷く板をひたすら磨く作業をしていました。あまり楽しそうな様子でなかつたので、「もうやめませんか?」と提案してすぐ機械を捨てて部屋を空っぽにしました。当然何してんだ?」と職員に言われましたね。

3日の合宿を体験させられたことで、えらく感動して障がい児教育の世界にのめり込み、それから本格的に勉強を始めたんです。卒業後は特別支援学校の教員を目指していたのですが、その年に募集がなかつたので福山市にある福祉施設に就職しました。

就職してすぐに木工作業班の担当になりました。彼らは植木鉢の下に敷く板をひたすら磨く作業をしていました。あまり楽ししそうな様子でなかつたので、「もうやめませんか?」と提案してすぐ機械を捨てて部屋を空っぽにしました。当然何してんだ?」と職員に言われましたね。

山出・施設で暮らす人たちにとつて「自分がここにいていいんだ」という自らの存在意義を主張できる活動が必要ではなかとを考えました。そのひとつにアートや音楽があると思います。絵を描くことが好きだったので絵画活動を始めたんですが、そもそも木工作業班には絵を描きたい方が集まっているわけでもないし、身体的にも描くことが困難な方も

山出・試行錯誤を続けるなかで、出で入れている施設や講座に足を運んで、障がいのある方の芸術文化活動の世界を知り、自分が働いている施設で勝手に展覧会を始めたんです。



広島市現代美術館の『一人快芸術』展に選出された施設利用者の武田憲昌さんによる作品

櫛野・オーブン時は『アール・ブリュット・ジャポネ展』の巡回の開催依頼がありましたが、「今まで温めていた企画をやらせてくれ」という思いでした。『鞆の津ミュージアム』は施設の人たちのみでなく、多様な環境に置かれた人たちを紹介する企画展を開催していくました。最初の企画『リサイクルリサイタル・幸せの時間の共有!』展は、いわゆる「グルーピング」でした。2ヶ月間、障がい

とをやり続けているという点です。効率主義のなかで生きる僕たちには、できるだけ無駄を省くことが美德とされます。そうしたなかで、彼らのように人生をかけて壮大な無駄なことを続けることは決して真似できない。でも、どちらが充実した人生を送っているんでしょう。障がないがあるから素晴らしい作品を作れるわけではありません。どんな人に対しても表現者としてリストアートしたうえで取材をお願いしています。作品だけでなく、作り手の人生や、どんな経緯があります。

山出・生きている時代や文化圏、そしてあらゆる制限があるなかで、何かを伝えようとする衝動が表現活動だとしたら、作品は必ずしも表現活動から出発して解釈されるのではなく、その人の人生や背景から始まるのかもしれません。ゴッホは死後に作品が評価され、過去の手紙などから彼の人生や思いを辿りたいますが、そういうたびに本人自身の感情がわからなくなまま発掘されることは果たして福祉なのでしょうか？

編集者で写真家の都築響一さんとの出会いです。都築さんの家を訪問したときに、中高年の主婦が余暇を利用して制作する『おかんアート』が置いてあったんです。面白いから自分でも探しに都築さんに紹介しようと思ったのが始まりです。

福山駅から車で30分というアクセスの悪い場所に倉庫を改装した『スナックジルバ』があるのですが、そのマスターの城田貞夫さんは手作りのからくり人形を使つた一人芝居を夜な夜な繰り広げています。それを美術館に持つてきても、本来の面白さや魅力は伝わらないし、結局は作品を搾取しているだけなんじやないかと考えるようになりました。

そこで最近は、表現者の元を訪ねる『櫛野展止と行く！アウトサイドの現場訪問ツアー』を積極的に開催しています。僕が仲介役になつて参加者と表現者を繋ぐことで、爾々と制作していた表現者にも作品のリアクションが返つてくる。今年度は関東にまで拡大したツアーを実施しています。

山出：本人たちは作品を見てほしいといふ意識で作品を作つてゐるのでしょうか？

櫛野・人それぞれです。城田貞夫さんはお客様を楽しませたい一心で作品制作を続けています。一方で、短冊状に切つた成人雑誌をボンドで固めた

ないです。

福山駅から車で30分というアクセスの悪い場所に倉庫を改装した『スナックジ

ルバ』があるのですが、そのマスターの

城田貞夫さんは手作りのからくり人形

を使つた一人芝居を夜な夜な繰り広げ

ています。それを美術館に持つてきて

も、本来の面白さや魅力は伝わらない

し、結局は作品を搾取しているだけなん

じやないかと考えるようになりました。

山出：現代美術のように、当時は価値が

ないとされていたものが時代の変化で

本流となることもあります。櫛野さんは

アウトサイダー・アートがインサイドに

逆転して本流となっていくことを望む

のでしょうか？

櫛野・現代美術は現代の事象を包括的

に捉えた美術です。アウトサイダー・

アートも本来は現代美術として評価さ

れなければいけないと思つています。ま

さにインサイドに組み込んでほしいと

いう願いもありますが、彼らは社会から

切り離され、かつ高齢者が多いのでタイ

ムリミットが迫つています。だから早く

1人でも多くの表現者に出会いたいと

考えていました。



福山市にある『スナックジルバ』マスターの城田貞夫さん



稲村米治さん(群馬県)



椿 八郎さん(千葉県)



小林伸一さん(神奈川県)

のある作品なのに現代美術の枠には入っていないし、ましてや日本のアーティスト業界からも無視されていますからね。

山出：現代のアール・ブリュットは、本

来はこういった作品なのではないかと思います。

櫛野・そうですね。特にセクシャリティの表現に情熱を向けた人は、「美術」の世界で下に見られる悲劇があります。表現力は高度なのに、日常生活のなかでタブーとして扱われてしまうことも多いです。独立して開館した『クシノテラス』で企画した『性欲スクランブル』展ではそうした問題に取り組んだのですが、今後も社会問題をテーマにした企画を行つていきたいです。

注2 ヤン・ファーブル
1958年ベルギー出身の美術家、演出家、振付家。アントワーヌの曾孫。1993年にタマムシを用いて表面を埋め尽くした彫刻『昇りゆく天使たちの壁』(金沢21世紀美術館所蔵)を発表した。

櫛野・僕はアール・ブリュットという言葉は意図的に使わないようにしているんです。今のアール・ブリュットは善良な側面しか紹介されておらず、対照的に犯罪者やヤンキーのような表現は排除される傾向にあります。だつたら、僕はその負の部分を担当しようという思いがあるんです。アール・ブリュットのブームに対する1つのアンチテーゼとして問い合わせたいという意識を持つています。

アウトサイダー・キュレーターと名乗っているもう1つの理由は、単にアウトサイダー・アートをキュレーションすると一緒に人生を伴走する覚悟があるという決意表明です。『クシノテラス』では今も展覧会を開催していますが、展覧会の開催自体にも疑問があるんですよ。だってそれらの作品は本来美術館ではなくアウトサイドにあるべきものじゃ

山出：櫛野さんは自らをアウトサイダー・キュレーターと名乗っていますよね。

櫛野・僕はアール・ブリュットという言葉は意図的に使わないようにしているんです。今のアール・ブリュットは善良な側面しか紹介されておらず、対照的に犯罪者やヤンキーのような表現は排除される傾向にあります。だつたら、僕はその負の部分を担当しようという思いがあるんです。アール・ブリュットのブームに対する1つのアンチテーゼとして問い合わせたいという意識を持つています。

アウトサイダー・キュレーターと名乗っているもう1つの理由は、単にアウトサイダー・アートをキュレーションすると一緒に人生を伴走する覚悟があるという決意表明です。『クシノテラス』では今も展覧会を開催していますが、展覧会の開催自体にも疑問があるんですよ。だってそれらの作品は本来美術館ではなくアウトサイドにあるべきものじゃ

一アウトサイダー・キュレーターと名乗っていますよね。

山出：櫛野さんは自らをアウトサイダー・キュレーターと名乗っていますよね。

名乗る覚悟ー